

## 講演③

「横浜銀行におけるDX推進とセキュリティ対策について」というテーマで、小貫利彦氏（株式会社横浜フィナンシャルグループ 執行役員 株式会社横浜銀行 取締役常務執行役員）、西本逸郎氏（株式会社ラック 技術顧問）による講演が開催されました。



小貫利彦氏

西本逸郎氏

小貫氏は、人口減少やゼロ金利政策解除といった地域金融機関を取り巻く厳しい現状を共有し、横浜銀行が「ソリューション・カンパニー」への変革を目指していることを説明しました。具体的には、店頭営業のペーパーレス化や非対面サービスの拡充、AI活用による業務効率化を進め、創出された時間を「お客様と向き合う時間」へ転換するDX戦略を推進しています。

DXの進展に伴い、サイバーリスクは経営のトップリスクと位置づけられ、セキュリティ体制を「自助・共助・公助」の3軸で構築することが大事です。特に地銀同士の連携による「共助」は知見共有に効果的であり、官民連携や今後求められる耐量子暗号(PQC)対応においても不可欠であるとの考えが示されました。

続く対談では、銀行が詐欺対策の「最後の砦」である社会的責任が再確認され、AI活用における若手育成の課題に対し、「インシデント対応こそが人を育てる」と述べられました。DXとセキュリティは不可分であり、信頼を守るための広範な連携が今後の鍵となることが示唆されました。

## ランチセッション

「「文系のセキュリティ」～2線の現場から愛をこめて～」というテーマで、2線の呑べえ佐藤氏（SecureNavi 株式会社）によるランチセッションが開催されました。



2線の呑べえ佐藤氏

佐藤氏は、予算や専任人材が不足し、担当者が日々変わる安全基準の中で属人的に責任を負いがちな現状の課題が指摘されました。この状況を脱却し、個人ではなく組織の構造で責任を担保する仕組み作りが重要です。

その解決策の自社ツールとして、リスク評価を一元化する「2線の匠クラウド」、AIがチェックシートに自動回答する「SecureLight」、ISMS等の運用を自動化する「SecureNavi」、SOC2対応を支援する「Fit&Gap」の4製品が紹介されました。これらのソリューションは、判断を組織の資産に変え、セキュリティ責任を個人から構造へと移行させると説明されました。

講演の最後には、コミュニティ「文系のセキュリティギルド」の設立と、3月26日にHENNGE社で開催される第7回情セキ交流会が案内されました。

## 講演④

「民学官連携によるサイバー犯罪対策」というテーマで櫻澤 健一 氏（一般社団法人日本サイバー犯罪対策センター 業務執行理事）による講演が開催されました。



櫻澤 健一 氏

本講演では、巧妙化・高度化するサイバー犯罪の現状を踏まえ、警察・民間企業・学術機関が連携して対策を進めることの重要性について、JC3 の取り組みを中心にご説明いただきました。

冒頭では、日本国内において犯罪認知件数自体は減少傾向にあるものの、非対面型詐欺による被害額が急増している現状が示されました。特に、フィッシング犯罪グループによる攻撃やインターネットバンキング・証券口座を狙った不正送金、SNS を悪用した詐欺が深刻化しており、詐欺被害が全体の大部分を占めている実態が紹介されました。金融機関を装ったフィッシングやテクニカルサポート詐欺の実例を通じて、近年のサイバー犯罪がシステムの脆弱性だけでなく「人の心理的弱点」を巧みに突くものであることが強調されました。

続いて、JC3 の活動として、法執行機関・企業・大学が連携し、情報共有やマルウェア解析、フォレンジック調査を実施していることが紹介されました。警察が保有する高度な解析技術や復号ツールを活用するためには、被害発生時に早期相談することが重要だと指摘されるとともに、インド中央捜査局との国際共同捜査による犯罪組織摘発事例も取り上げられました。一方で、生成 AI の悪用により攻撃側の能力が拡張されつつある現状への懸念も示され、サイバー犯罪対策が新たな局面に入っていることが示唆されました。

さらに、企業が被害を公表せず抱え込む傾向についても言及がありました。被害情報を共有しないことが結果的に同様の犯罪を拡大させる恐れがあるとして、情報公開と組織間連携の重要性が強調されました。各組織が守るべき対象や立場の違いから難しい面もありますが、社会全体で

被害を受け止め、互いに学び合う文化を育てることが再発防止につながると提言されました。

最後に、サイバー犯罪への対抗には単独組織での対応に限界があり、民間・学術・行政が垣根を越えて知見を共有することが不可欠であると述べられました。情報を開示した組織を責めるのではなく、互いに支え合いながら社会全体で防御力を高めていく姿勢こそが、これからのサイバー犯罪対策に求められる方向性であるとして、講演を締めくくられました。

## ナイトセッション総括パネルディスカッション

森井先生とナイトセッション座長によるパネルディスカッションの総括が行われました。



左から、蔵重 龍 氏、神山 太朗 氏、高橋 正和 氏、丸山 満彦 氏

各セッション座長による振り返りに続き、森井先生からセキュリティに関する課題が改めて整理されました。会場からの質問に対して、神山氏から身代金に関して見解が示され、高橋氏からは AI の利点とリスクおよびフィジカル AI の課題が述べられました。蔵重氏は報道の視点から AI との向き合い方や過度な AI 依存に対する懸念が示されました。最後に丸山氏より、サイバー分野をデジタル空間のみとして捉えるのではなく、デジタル空間とフィジカル空間が一体化した空間として認識して対応することが大事であると、議論が締めくくられました。

## 閉会挨拶

本大会の副実行委員長 村上理一氏 により閉会の挨拶をいただきました。

オンラインを含め全国から 400 名を超える、ここ数年で一番多いご参加をいただいたとのこと  
です。来年もまた松山で皆様にお目にかかれましてを楽しみにしておりますとご挨拶されました。



村上 理一 副実行委員長

## 今年の SecDogo Digest の編集について

今年の SecDogo Digest 第 1 号～第 5 号の編集は以下のメンバーで行いました。

ありがとうございました。

上野 穂、葛原 知輝、西脇 弘輝、丸岡 惇（愛媛大学大学院 M1）

岡 巧人、中山 智暉（愛媛大学工学部 B4）

白石 真一、川崎 陽平、鷹尾 真一郎、松島 玲音、田中 壮汰（愛媛大学工学部 B3）

甲斐 博（愛媛大学）

曾根 直人（鳴門教育大学）